

## 教員養成大学卒業後のキャリア形成と大学の学び —兵庫教育大学学校教育学部卒業者へのアンケート調査結果の考察(2)—

### Career Development based on Learning Experiences at a University of Education: An Examination of the Results of an Alumni Questionnaire at Hyogo University of Teacher Education, Part 2

横山 香\* 新井 肇\*\* 古川 雅文\*\* 山中 一 英\*\*  
YOKOYAMA Kaori ARAI Hajime KOGAWA Masafumi YAMANAKA Kazuhide

本論文は、平成23年1月から2月にかけて総合教職キャリアセンター設置準備室(現「教職キャリア開発センター」)で実施した、本学学校教育学部卒業者へのアンケート調査の結果とその考察の後編である(前編は平成24年2月発行『兵庫教育大学研究紀要 第40巻』に収録)。本学学生が優れた資質能力と豊かな人間性を備えた教員・社会人となるために、どのような支援が必要であり、また可能であるのか。本研究の目的は、本卒業生アンケートを、学生・院生のキャリア形成支援のためにいかに役立てるかを考えることにある。アンケートは、(1)卒業生の卒業後のキャリアパス、(2)職務上直面した困難や問題と、その解決の際に大学の学びが役に立ったかどうか、(3)大学の学びで職務上役に立っていること、(4)現在学びたいと思うことと、その機会や場所、(5)社会人に必要と思われる能力・資質、(6)後輩へのメッセージ、について尋ね、581人の卒業生から回答を得ることができた。本論文(後編)ではアンケートの(3)~(6)の部分を取扱う。また卒業生調査の先行研究を踏まえ、本卒業生アンケートが、教職キャリア形成研究において活用できる可能性を示す。

キーワード：卒業生調査、キャリア形成、教員養成大学での学び、社会人に必要な資質能力、卒業生研究の活用

Key words : alumni questionnaire, career development, learning experiences at a university of education, required competencies for working people, utilizing alumni research

#### 1. 本論文の目的および調査方法

兵庫教育大学では、学生の幅広いキャリア形成を支援するための組織「教職キャリア開発センター(通称キャリアセンター)」を平成24年4月に開設し、就職支援、キャリアデザイン支援、調査研究の各部門を3つの柱として運営を行っていくこととなった。教職キャリア開発センターのミッションは、学生が教員・社会人となった後にも、豊かで幅広い人間性を育み、主体的に学ぶ教師、すなわち「学び続ける教師」となるために、入学から卒業まで、さらには卒業後も見通したキャリア形成支援を行うことにある。「学び続ける教師」という理念は、本学において制定されている「教員養成スタンダード」の理念と一致したものであるが、なぜ学び続けることが必要なのかを、教職キャリア開発センターのミッションでは以下のように説明している。

今日のような知識基盤社会においては、社会状況や子どもたちの変化を理解するためには、最新の情報を獲得していかなければなりません。教師には、学んだことや体験したことを批判的・反省的に問い直し、自らの人間性や経験の幅を広げ、成長することが求められています。また、子どもたちに学ぶことの楽しさを教えるためには、教師自身が学ぶことの楽しさを知っていなければなりません。さらに、研究を通じて知識

を深化させ、知的態度を養っておく必要があります。(兵庫教育大学教職キャリア開発センターのインターネットサイト、「センターについて」より抜粋<sup>1)</sup>)

将来学生が知識のみならず、豊かで幅広い人間性も備えた「学び続ける教師」になるためには、在学時にその土台を作ることが必要となる。そのために多面的な支援をするのが教職キャリア開発センターの役割であり、就職支援、キャリアデザイン形成支援、主体的で自発的な学習態度形成の支援などが施行されている。これらの各支援を行っていくには、どのような内容や方法が効果的であるかを探究する学術的基盤が必要となってくるが、教職キャリア開発センターは、そのための調査研究を行う機能も備えている。

本論文で扱う本学学部生の卒業後のキャリア形成に関するアンケート調査は、教職キャリア開発センターが設置される以前に、同センターの前身である総合教職キャリアセンター設置準備室が平成23年1月から2月にかけて実施したものである。

設問は以下の6点あり、(1)および(2)については、本論文の前編(『兵庫教育大学研究紀要 第40巻』153~166頁)にて結果の考察を行っている。後編である本論文では、設問(3)から(6)についてのアンケート結果を取扱う。

\*教職キャリア開発センター \*\*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻生徒指導実践開発コース

平成24年11月16日受理

- (1) 本学卒業生の卒業後のキャリア形成・変遷について。アンケートの設問は「回答者の属性」。
- (2) 職務上の困難や問題とその原因および解決方法について。さらにその解決に、大学の学びが役に立ったかどうか。アンケートの設問は Q1-1, Q1-2, Q2, Q3, Q4, SQ4-1, SQ4-2, SQ4-3。
- (3) 大学時代に学んだことで、現在の職務上役立っていること。またそれはどこで学んだか。アンケートの設問は Q5。  
困難や問題の解決という範囲を設定している(2)の設問とは異なり、(3)ではより一般的な意味で、現在の職務や生活において役に立っている大学の学びと、それを学んだ場所について質問している。
- (4) 現在学びたいことと、それを学びたい機会や場所。アンケートの設問は Q6。  
教職キャリア開発センターの目標の一つに、卒業後を見通した支援がある。その具体化のためには、どのような学びが、教員・社会人となった現在求められているのか、またそれをどこで学びたいと考えているのか、という点について知っておく必要がある。
- (5) 社会人に必要と思われる能力・資質。アンケートの設問は Q7。
- (6) 後輩へのメッセージ。アンケートの設問は Q8。

調査方法は次の通りであった<sup>2)</sup>。

- ・実施時期：平成23年1月27日～2月18日。回答締め切り後も1週間程度、回答を受け付けた。
- ・配布先：兵庫教育大学学校教育学部卒業生（住所不明など連絡先不明者を除く）4,376人，そのうち調査票未達は59人であった。
- ・回収方法：紙面または Web による回答を求めた。
- ・回収数（回収率）：581人（13.3%）であった。
- ・調査票の構成：調査票は上記の6つの調査内容にしたがって構成された。具体的な数値（「回答者の属性」の「年齢」，「卒業年」，「卒業直後から現在までの職歴または学歴等の経験年数」，Q2, Q4, SQ4-2）や具体的な名前（「回答者の属性」の「現在居住している都道府県名」）を記入させる方式，選択肢を示して「あてはまる」ものを選択させる方式（「回答者の属性」の「卒業直後から現在までの職歴または学歴等」），選択肢を示して「最もあてはまる」と思うものを選択させる方式（Q1-1, Q1-2, Q5およびQ6の「場所」の選択，Q7），自由記述を求める方式（Q3, SQ4-1, SQ4-3, Q5, Q6, Q8）の各回答方式により回答を求めた。各質問の選択肢については，それぞれの結果の部分を参照のこと。

## 2. アンケートの結果と考察

### (1) 回答者の属性

前編には回答者の属性について詳述してあるが，本文では参考のために属性（性別，年齢，職歴，職業）を表1に示しておく。

回答者の性別としては，男性が約3割，女性が約7割であった。これは本学の男女構成比にほぼ一致している。年齢は卒業直後の年代（22～24歳）と45歳以上を除けばおおよそまんべんなく分布している。

表1 回答者の属性

	度数	%	
性別	男	172	29.6
	女	407	70.1
	不明	2	0.3
年齢	22～24歳	37	6.4
	25～29歳	104	17.9
	30～34歳	111	19.1
	35～39歳	116	20.0
	40～44歳	127	21.9
	45歳以上	86	14.8
合計	581	100.0	

職歴および現在の職業を表2に示す。保育士を含む教職経験者は回答者581人中481人で82.8%，教職以外の職業の経験者は95人で16.4%，職業経験なしが5人で0.8%となっている。現在の職業としては，保育士を含む教職従事者の合計が426人（73.4%）で，そのうち小学校教員が最も多く，320人（55.1%）となっている。

表2 回答者の職業（教職には臨時採用・非常勤講師を含む）

	度数	%	
職歴	教職経験者	481	82.8
	教職以外の職業経験者	95	16.4
	職業経験なし（大学院生等）	5	0.8
	581	100.0	
現在の職業	小学校教員	320	55.1
	中学校教員	36	6.2
	高校教員	5	0.9
	幼稚園教員	28	4.8
	特別支援学校教員	12	2.1
	教育委員会指導主事等	10	1.7
	保育士	15	2.6
	（教職合計）	426	73.4
	大学教員	2	0.3
	塾講師	3	0.5
	公務員（教員を除く）	24	4.1
	会社員・会社役員	28	4.8
	団体職員	5	0.9
	自営業	5	0.9
	アルバイト等*	20	3.4
	専業主婦（主夫）	42	7.2
	大学院生（学生）	3	0.5
大学院生（社会人）	1	0.2	
学部学生（編入）・専門学校生	1	0.2	
無職	5	0.9	
その他	16	2.8	
（教職以外の合計）	155	26.7	
合計	581	100.0	

\*「アルバイト等」は、「パート・アルバイト・派遣社員等の有期契約従業員」を指す。

### (2) 職務上役立っている学生時代に身につけたことと、それを学んだ場

大学の学びが社会に出てから役に立つものかどうか，

あるいはそうあるべきかについては、さまざまな見解があるだろう。医師、歯科医、看護師、教員など国家資格や免許が必要な職業については、大学での養成が職業と直接結びついている。また薬剤師、法曹関連の職業、技術や福祉関連の職業などは、国家資格や免許の取得が大学の養成とイコールではないにしても、大学の学びと職業が深く関連している。一方、とりわけ哲学や文学といった人文科学のような学問領域などは、学部卒業後に企業等へ就職することを考えた場合には、大学の学びと職業が直接結びつくことは大抵の場合、非常に限定されている。したがって、一言で大学の学びと言っても、学問領域と卒業後の職業との関連を考慮に入れずに一括りにすることは難しい。これは高等教育における学問とはそもそも何かという問題とも関わってくるものでもある。本学の場合は、教員養成大学という目的大学なので、この点においてはある程度明確に、大学の学びは教職と直結していると想定することができる。しかし、教員養成大学での学びは実際に仕事に役立っているのだろうか？また役に立った学びは、どのような場所や機会 で身につけたのだろうか？正課外の学びもまた、大学の学びとして重要だったのだろうか？以下の設問 Q5（図 1）は、このような問題意識から設定されたものである。

回答は 3 件までを自由記述する形式であったため、すべての回答を熟読したうえで、図 2 に示す 24 項目に分類した。項目の分類にあたっては、本学教員養成スタンダード開発室の龍輪飛鳥特命助教（所属は当時）の助言・協力を得て、本論文執筆者である新井と横山で項目を定めた。また、それぞれの自由記述回答の各項目への分類は、龍輪特命助教と横山が、各自再度回答を熟読して行い、その後 2 人の結果を照らし合わせ、さらに回答内容について再検討したうえで、最終的な分類を共同で行った。

以下に、教職経験者と教職以外の職業経験者（「非教職」）に分けて結果を考察する。

Ⅲ 現在のお仕事やキャリア形成に関するお考えをうかがいます。（現在、職業に就かれていない方は、過去の主なお仕事について当時の状況をお答えください。）

Q 5 学生時代に身につけたことで、①仕事の役に立っていると思うことを、3 つ以内で具体的に書きください。また、②それを身につけた機会や場所を選択肢からお選びください。

① 学生時代に身につけたことで、仕事の役に立っていると思うこと	② 右から選択	②身につけた機会や場所（選択肢）
(例) 1. 自分の考えをまとめて発表する力 2. 教科についての広範な知識 3. 相手の立場に立つことができる	4 2 6	1. 学部の講義・授業 2. 専門科目のゼミ 3. 教育実習 4. サークル活動 5. ボランティア体験 6. アルバイト 7. 地域活動 8. 先輩・友人のネットワーク 9. 担当教員との関係 10. 他大学生との交流 11. その他（選択された場合は内容を具体的にお書きください）
1.		
2.		
3.		

図 1 Q5 の設問形式

(i) 教職経験者

保育士を含む教職経験者の回答者数は 455 人で、うち回答件数 1 件は 80 人、2 件は 118 人、3 件は 253 人、「特になし」が 4 人であり、455 人の総回答件数は 1,079 件であった。内容不明（3 人）と無回答（23 人）は回答者数・回答件数にカウントしていない。

図 2 に示すように、教職経験者に関して最も多かった記述は、「他者を理解し、円滑なコミュニケーションを図る能力」に関するものであった（160 件）。どのような職業にとっても、また一般的な社会生活を送るうえでも、コミュニケーション能力は最も基礎的なものである。大学時代にこの能力を身につけたという回答が多かったのは、青年期から社会人へと移行する多感なこの時期に、さまざまな人との出会いや多様な体験を通じて、他者への理解やコミュニケーション能力が高められたと考えられるためであろう。

図 3 にはそれぞれの項目を身につけた機会や場所を示すが、「他者を理解し、円滑なコミュニケーションを図

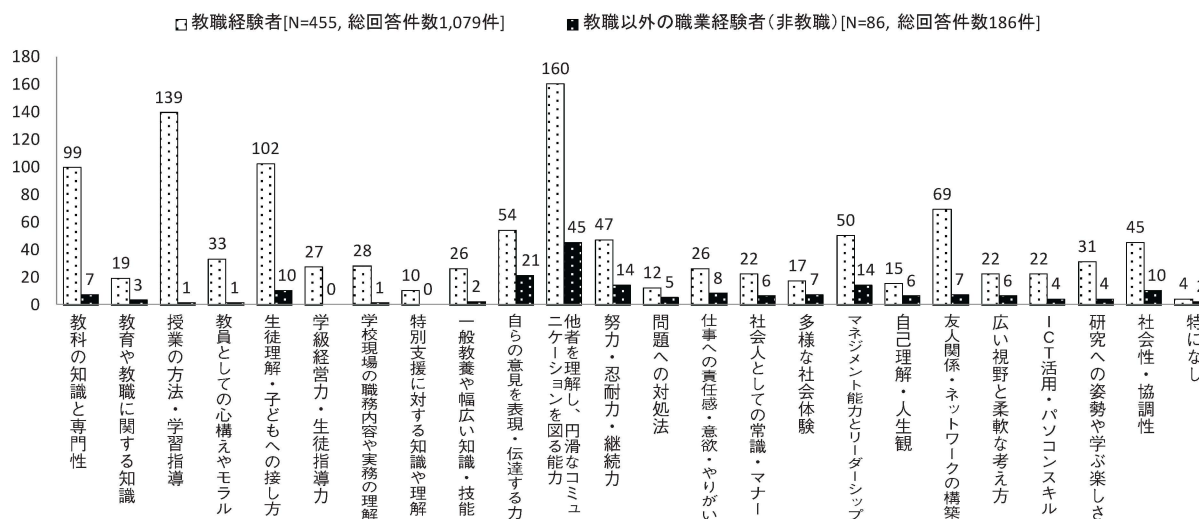


図 2 学生時代に身につけたことで、仕事の役に立っていると思うこと。回答数は 3 件まで。

る能力」を身につけた場所として挙げられているのは、正課内活動よりも正課外活動が多く、「アルバイト」が28.1%、「サークル活動」23.1%、「先輩・友人のネットワーク」20.0%、「ボランティア体験」6.3%などとなっている。

次に続くのが、「授業の方法・学習指導」(139件)、「生徒理解・子どもへの接し方」(102件)、「教科の知識と専門性」(99件)といった教職に関連する項目である。教職経験者にとっては、このような実務に直結する実践的な学びは、やはり役立つものとして捉えられているようであり、その結果、高い回答数となったと考えられる。

「授業の方法・学習指導」を身につけた場所として挙げられていたのは、「教育実習」が圧倒的に多く58.3%、次に「学部の講義・授業」20.9%、「専門科目のゼミ」12.2%となっている。「生徒理解・子どもへの接し方」では、「教育実習」を挙げた回答者がさらに多く63.7%、次に「ボランティア体験」12.7%、「学部の講義・授業」9.8%、「アルバイト」7.8%と続く。「教科の知識と専門性」に関しては、48.5%の回答者が「専門科目のゼミ」、44.4%が「学部の講義・授業」を身につけた場所として挙げ、この2項目で9割以上を占めている。したがって、授業の方法や生徒理解といった教職の実践的な能力に関しては、おもに教育実習が、教科についての専門的な知識については、ゼミや講義・授業が大きな役割を果たしていると言えるだろう。

他に回答件数の多かったものとして挙げられるのは、「友人関係・ネットワークの構築」(69件)、「自らの意見を表現・伝達する力」(54件)、「マネジメント能力とリーダーシップ」(50件)、「努力・忍耐力・継続力」(47件)、「社会性・協調性」(45件)といった項目である。

「友人関係・ネットワークの構築」を身につけた場合は「先輩・友人のネットワーク」が最も多く、66.7%となっている。また「自らの意見を表現・伝達する力」では「専門科目のゼミ」(44.4%)が最も多かった。

「マネジメント能力とリーダーシップ」、「努力・忍耐力・継続力」、「社会性・協調性」といった諸能力は社会人としての能力・資質の基本的なものであるが、これらの能力を身につけた場として、これら3項目に共通して回答が多かったのは「サークル活動」(それぞれ46.0%、59.6%、68.9%)であり、クラブ活動などの課外活動が非常に大きな役割を果たしていることが分かる。とりわけ本学においては、他大学と比較しても多くの学生がクラブ活動に熱心であることが、この数値にも表れていると言えるだろう。

教職に関するもので回答件数が少なかった項目は、「特別支援に対する知識や理解」(10件)、「教育や教職に関する知識」(19件)となっている。前者については、学術的な問題として大学で学ぶことができるようになっ

たのが比較的最近であることと関連しているかも知れない。後者については、「教育法規」、「教育・保育の知識」、「教育行政」等の記述をこの項目に分類したが、より具体的な内容に言及している回答はそれぞれの項目に分類したため、この項目への回答数が少なくなってしまうと考えられる。

その他、「問題への対処法」(12件)、「自己理解・人生観」(15件)、「多様な社会体験」(17件)に関する記述は少なかった。地方という環境で、教職という同じ進路・目的に向かって学び、寮生活やクラブ活動が中心の比較的均質な共同体的生活を送るために、一人で困難に立ち向かわなければならなかったり、孤独な環境で自己とじっくり向き合ったり、他大学の学生と交流したりする機会が実際に少なくなってしまうことはやむを得ないことである。しかし学生の人間的な成長を考えた場合、このような環境を学生たちがいかに克服するのか、あるいは逆に、このような環境(特に寮生活など)をいかに活かして学生の学びにするのか、大学は考えていく必要があるだろう。

#### (ii) 教職以外の職業経験者(非教職)

教職以外の職業経験者(非教職)の回答結果は図2および図4に示す。アンケート全回答者数は86人(うち回答数1件は21人、2件は28人、3件は35人、「特になし」2人)で、無回答は9人であった。回答者86人の総回答件数は184件であった。

非教職においても教職経験者と同様、「他者を理解し、円滑なコミュニケーションを図る能力」に関する記述が最も多く(45件)、大学時代が人間関係の基盤となるコミュニケーション能力を伸ばすための重要な時期となっていることが分かる。次に「自らの意見を表現・伝達する力」(21件)となっており、「マネジメント能力とリーダーシップ」と「努力・忍耐力・継続力」(各14件)、「社会性・協調性」(10件)などが続いている。「学級経営力・生徒指導力」および「特別支援に対する知識や理解」に関しては回答がなかった。

各項目の身につけた場所については、図4に示すとおりである。「他者を理解し、円滑なコミュニケーションを図る能力」では「アルバイト」が35.6%、「サークル活動」が26.7%、「先輩・友人のネットワーク」11.1%となっており、この順位は教職経験者と同じである。

一方、「自らの意見を表現・伝達する力」に関しては、「教育実習」が66.7%と圧倒的に多く、「学部の講義・授業」と「専門科目のゼミ」がそれぞれ14.3%となっており、合計すれば、ほぼ全体の回答者がこの能力を正課内(教育実習と授業)で身につけたと回答している点が、教職経験者と異なっている(教職経験者は「学部の講義・授業」16.7%、「専門科目のゼミ」44.4%、サークル活動

教員養成大学卒業後のキャリア形成と大学の学び

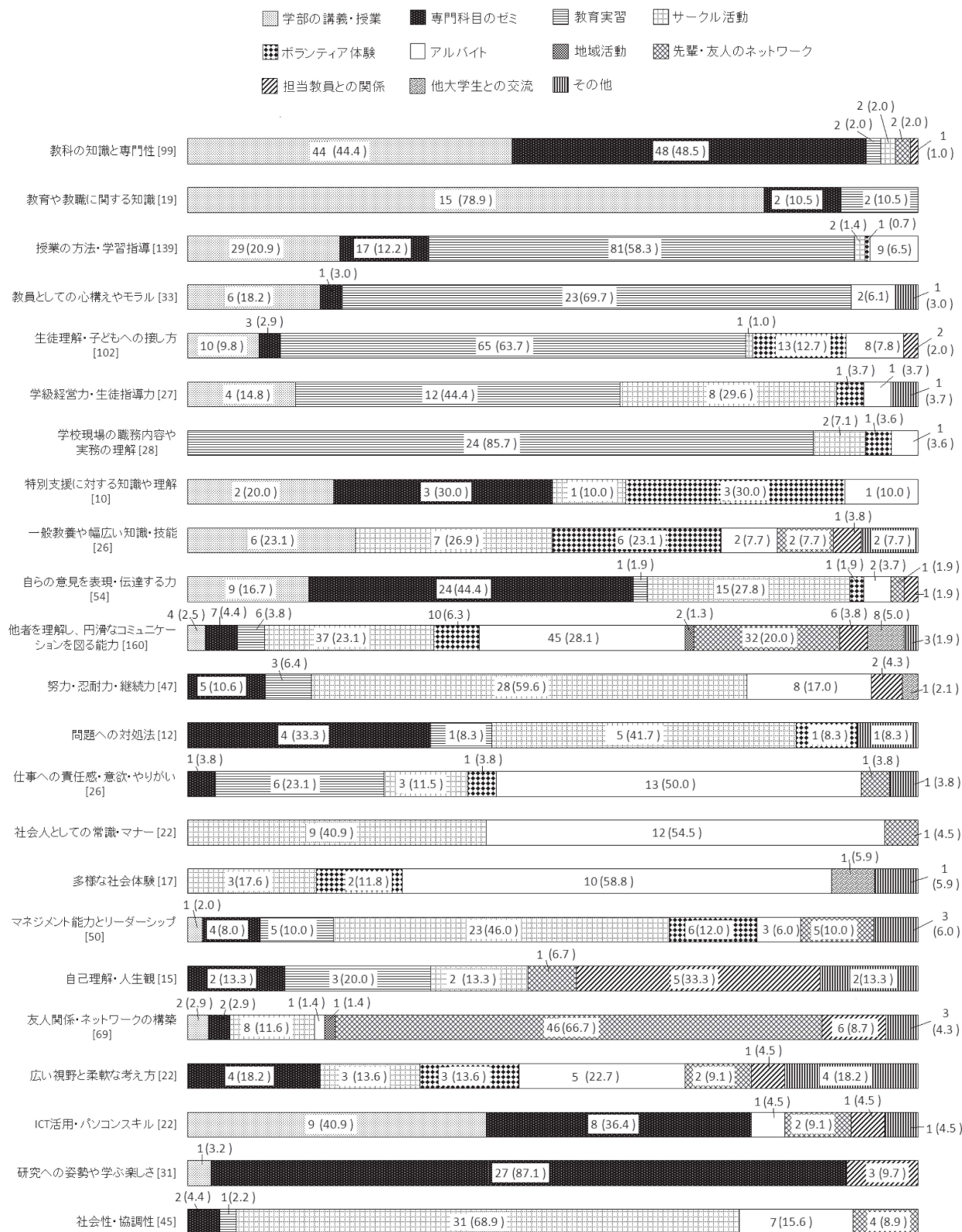


図3 学生時代に学んだことで、仕事の役に立っていることを身につけた場所の各項目別回答件数および割合（教職経験者）。「特になし」の回答を除いたため、回答者数451人、総回答件数1,075件。各項目名の[ ]内はその項目の合計回答件数を示す。グラフ内の数値は「身につけた場所」の各項目における回答件数で、( )内はそのパーセンテージを示す。

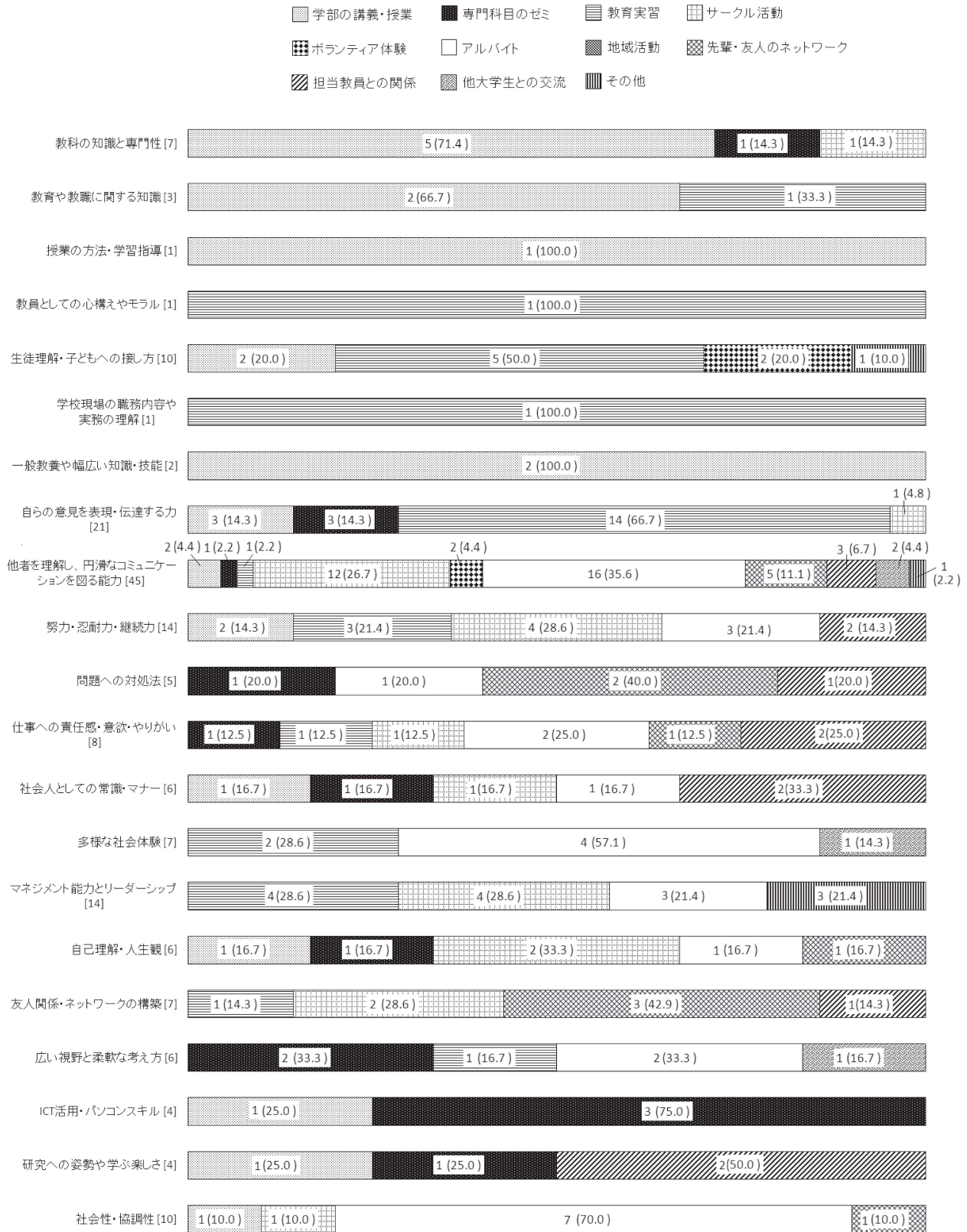


図4 学生時代に学んだことで、仕事の役に立っていることを身につけた場所の各項目別回答件数および割合（非教職）。「特になし」の回答を除いたため、回答者数84人、総回答件数182件。各項目名の〔 〕内はその項目の合計回答件数を示す。グラフ内の数値は「身につけた場所」の各項目における回答件数で、（ ）内はそのパーセンテージを示す。

27.8%に対し、「教育実習」は1.9%である)。教職経験者においては、人前に立って教えることが仕事そのものであり、教育実習はその実務を体験する重要な機会であるものの、実際働き始めれば、それは毎日のルーティンとして慣れていくという事実がある。一方、一般的な職業においては、例えば塾講師などの教育関連の職務に就かないかぎり、人前で話し、教える機会は限られてくる。それゆえ教育実習は、自分の意見を伝達し、表現するための貴重な機会と捉えられたのではないだろうか。

教職経験者と教職以外の職業経験者との違いはいくつか見られるものの、全体的に見れば、教職や専門教科に関する知識は大学の授業やゼミで、子どもとの接し方や学級経営など実践的な力に関しては教育実習で、コミュニケーションやマネジメント能力、努力・忍耐力等の社会人としての基礎的な能力・資質はサークル活動やアルバイトなどの正課外活動で身につけたと考えられている傾向を指摘することができるだろう。

また、自分の担当教員や印象的な教員の名を挙げている回答も見られた(「担当教員との関係」を挙げた回答は教職経験者29人、非教職13人)。教員が知識を与える存在としてだけではなく、人生の先達として学生に与える影響も少なからずあるようである。

その他、具体的に挙げることはできない、もしくは直接的に役に立っているとは言えないが、大学の学びはその後の人生でさまざまな形で役に立っていると感じる、という回答も散見された。

(3) 今後身につけたい知識や能力とその機会・場所

生涯教育や成人教育は現在、人生を豊かに、意義あるものとして過ごすためにその必要性が叫ばれている。従

来では特定の研修機関や、新聞社・放送局などのカルチャーセンターなどがその役割を担っていたが、現在では市民大学や社会人入学などの形で、一般市民に教育の場を提供する大学も増加してきている。教養的な講座だけではなく、専門知識を獲得し、修士や博士などの学位を取得してキャリアアップを図るための機関としても、大学には期待が寄せられている。

そこで Q6では卒業生の生涯教育に関するニーズについて調査した。設問内容および形式は図5のとおりである。

Q6 今後の仕事やキャリアアップなどのために、①これから身につけたい知識や能力などがあれば、3つ以内でお書きください。また、②それを身につけるための機会や場所として考えているものを選択肢からお選びください。

① 今後身につけたい知識・能力	② 身につけるための機会や場所 (選択肢)
(例) 1. 英会話	6
2. ICTの利用・活用法	1
3.	
1.	
2.	
3.	

図5 Q6の設問形式

本設問は3件まで記述可能であり、509人から回答を得た。本設問に関しては、現在の職業が関連してくるので、現在教職に就いている(「現職」)か、教職以外の職業についている、あるいは主婦(夫)や大学院生など職には就いていない(「現職以外」)かによって回答を分けた。現職の回答者数は381人、総回答件数は690件であり、現職以外の回答者数は128人、総回答件数は206件であった。回答件数1件は221人、2件189人、3件99人であり、

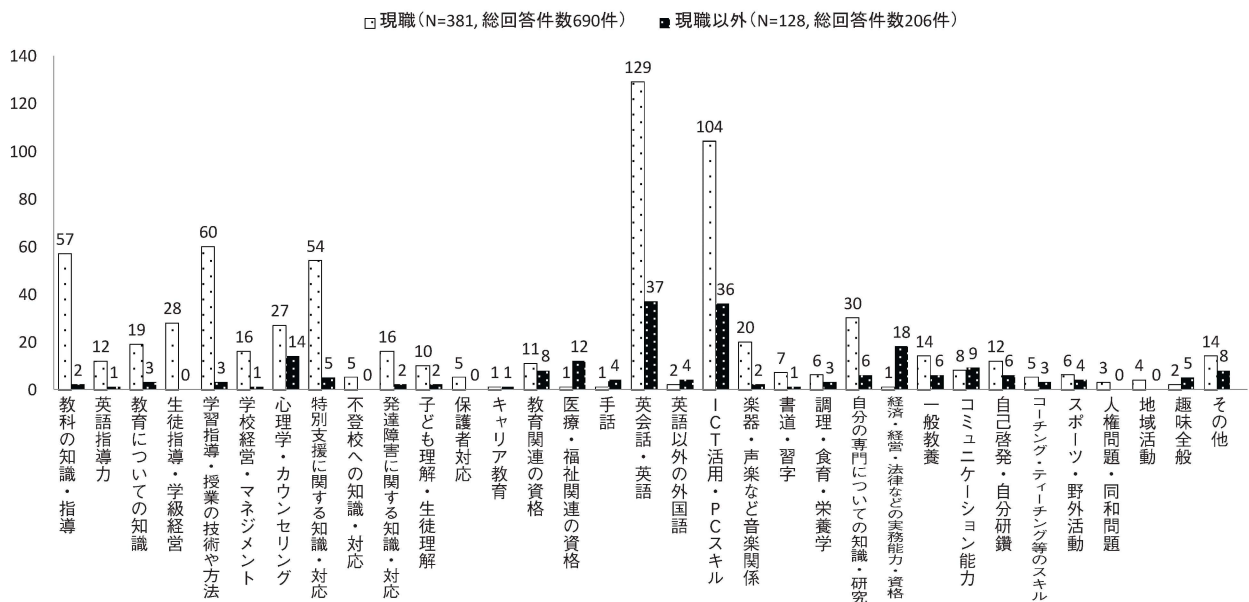


図6 今後身につけたい知識や能力 (回答者 N=509, 総回答件数896件)

合計総回答件数は896件であった。

本設問も自由記述であったので、Q5と同様の手続きを経て、図6の33項目に分類した。

最も多かった回答は「英会話・英語」(現職129件、現職以外37件)であった。「英会話・英語」を習いたい場所として挙げられているのは、図7に示すとおり「民間教育機関」が圧倒的に多く(67.5%)、おそらく専門的というよりは実用的な運用が目的であろう。以下で考察する「社会人に必要な能力・資質」についての設問では、英語の能力に関して「ある程度必要ではあるが、とても必要というわけではない」という見方が他の能力・資質に比べて多いことから、一般的には身につける必要性が叫ばれていながらも、現実には喫緊に必要不可欠という状況ではないため、「今後の希望」としてとどまっているのかも知れない。

参考までに「英語指導力」に関しては13件の回答中(現職12件、現職以外1件)、習いたい場所として10人(76.9%)が「教育センター等の研修」を挙げている。

次に多かった回答は「ICT活用・PCスキル」(現職104件、現職以外36件)であった。特にコンピュータやインターネット、携帯電話などのIT機器がいまほど普及していなかったり、簡単に利用できなかったりした世代にとって、生まれたときにはすでにPCが所与の環境として存在している世代の子どもたちを相手に仕事をするのは、非常に困難な時代になってしまっている。また書類などもワープロ等で作成して提出することが一般的になってきた。このような時代的要請に答えるためにも、また学校現場ではICTの導入・活用が今後ますます拡大していくと予測されることもあり、自ら進んで学ばなければならないと考えた回答者が多かったと考えられる。「ICT活用・PCスキル」を学ぶ場としては、「教育セン

ター等の研修」が最も多く37.9%、次に「民間教育機関」22.1%と続く。

他の回答としては、やはり教職関連が目立った。「学習指導・授業の技術や方法」(現職60件、現職以外3件)、「特別支援に関する知識・対応」(現職54件、現職以外5件)、「教科の知識・指導」(現職57件、現職以外2件)が、特に現職から多く挙げられている。これらを学ぶ場として最も多く挙げられていたのは「教育センター等の研修」(それぞれ50.8%、39.0%、33.9%)であったが、「大学の公開講座や講習」や「大学院での修学」も選択されており(特に「特別支援に関する知識・対応」においては「大学の公開講座や講習」33.9%、「大学院での修学」13.6%で、合計すると5割近くになる)、日頃の実践活動に対する理論的基盤を与える場として大学が期待されている様子が伺える。

他に件数が多かったものとして、「心理学・カウンセリング」(現職27件、現職以外14件)、「自分の専門についての知識・研究」(現職30件、現職以外6件)を挙げることができる。この2項目に関しては、学びたい場所として大学および大学院がいずれもほぼ半数を占めており(「大学の公開講座や講習」と「大学院での修学」を合計した割合は、「心理学・カウンセリング」で53.7%、「自分の専門についての知識・研究」で55.5%)、回答者が学術的・専門的な知識を求めていることが特徴的である。

全体的に趣味やスポーツ等への関心よりも、教養や知識などを求める向学的な傾向が見られた。このアンケートの結果から、学術的で専門的な生涯教育の提供をする場としてますます大学への期待が大きくなっていることが分かる。大学もその点を視野に入れながら、学生の卒業後のライフコースを見据えたキャリア形成支援を行っ

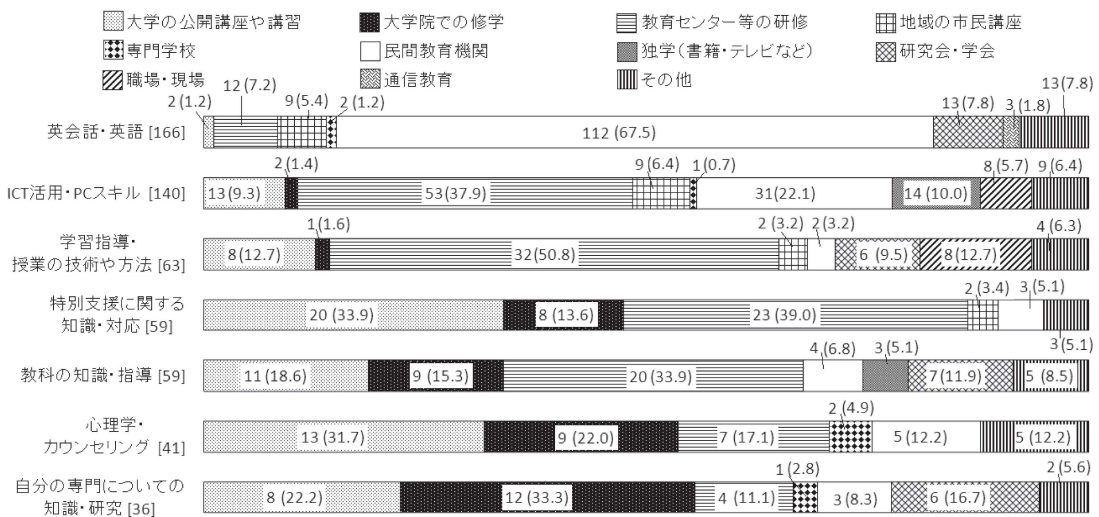


図7 今後身につけたい知識や能力を学びたい機会・場所(件数の多かった上位7項目)。各項目の[ ]内はその項目の合計回答件数。グラフ内の数値は「学びたい機会・場所」の各項目における回答件数で、( )内はそのパーセンテージを示す。



ていく必要があると言えるだろう。

(4) 社会人に必要な能力・資質

次に Q7では社会人の能力・資質の必要性について尋ねた(図8)。設問の意図は、教員に限らず、社会人として兼ね備えておくべき能力・資質が本学の卒業生にどのように認識されているのかを知ろうとするものである。今日、大学から社会への接続に対し、大学が学生のために何ができるのか、あるいは社会人としての基礎的・汎用的能力を大学でいかに養成するかなどが、各大学におけるキャリア教育の大きな課題になっている。

本設問に関しても Q6同様、現在の職業が関連してくるので、「現職」と「現職以外」によって回答を分けた。アンケートの結果では、社会人として最も必要とされている能力・資質は、「挨拶や礼儀・気配りなどのマナー」で、現職では83.3%、現職以外では81.9%が「とても必

Q7 下表の(1)~(15)に列挙した能力・資質は、教員に限らず、社会人としてどの程度必要だと思いますか。該当欄の1~4のいずれか1つに○をおつけください。

社会人としての能力・資質	1 とても必要	2 ある程度必要	3 あまり必要はない	4 まったく必要はない
(1) 職務に関する豊富な専門知識	1	2	3	4
(2) 専門分野を超えた幅広い知識や一般教養	1	2	3	4
(3) 文章での表現力・国語力	1	2	3	4
(4) 外国語の能力	1	2	3	4
(5) 計算・統計などの数的能力	1	2	3	4
(6) パソコンなどIT機器の使用能力	1	2	3	4
(7) 口頭での表現力(プレゼンテーション能力)	1	2	3	4
(8) 他者の意見を傾聴する能力	1	2	3	4
(9) 議論や交渉の能力	1	2	3	4
(10) 構想を実現する企画力や実行力	1	2	3	4
(11) 既存概念に捉われない柔軟な発想力	1	2	3	4
(12) 多様な文化や価値観に対する受容力	1	2	3	4
(13) チームワークにより問題を解決する能力	1	2	3	4
(14) リーダーシップ、指導力	1	2	3	4
(15) 挨拶や礼儀・気配りなどのマナー	1	2	3	4

図8 Q7の設問形式

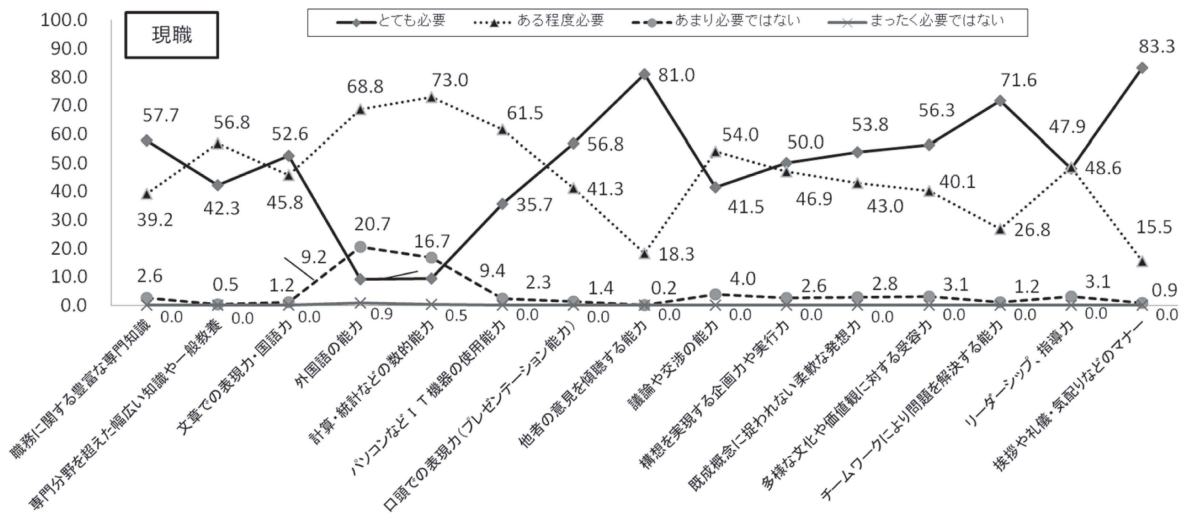


図9 社会人として必要な能力・資質(現職, N=426)。無回答はグラフに書き入れていない。

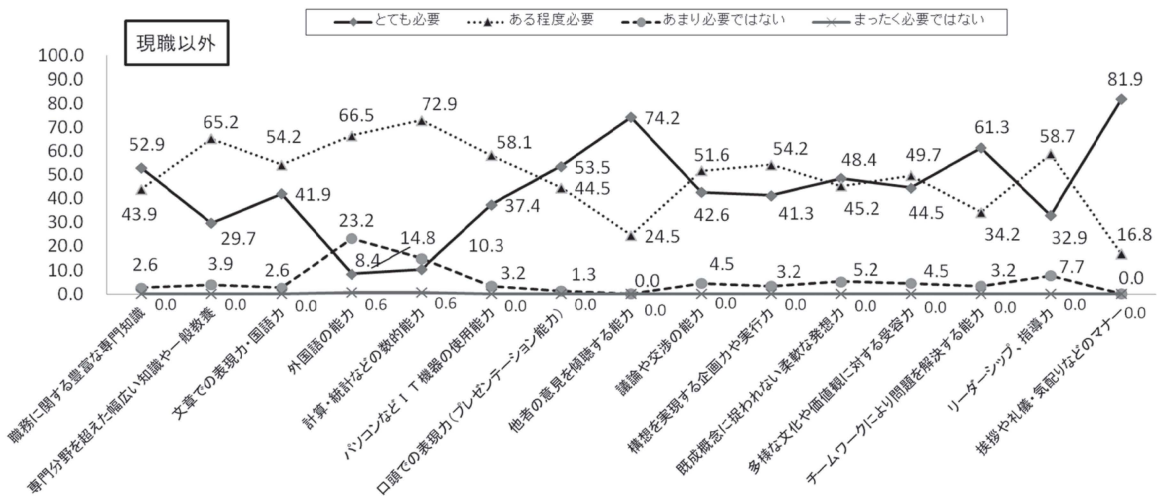


図10 社会人として必要な能力・資質(現職以外, N=155)。無回答はグラフに書き入れていない。

要」と回答している。さらに「とても必要」と回答のあった能力・資質は、「他人の意見を傾聴する能力」(現職81.0%, 現職以外74.2%), 「チームワークにより問題を解決する能力」(現職71.6%, 現職以外61.3%)と続く。教職であれ, その他の職業であれ, 常識的な態度やモラルと高いコミュニケーション能力を備え, スムーズな人間関係を築き, 同僚と協働して職務上の課題をこなすという社会人像が重要視されていると言える。

「とても必要」とまではいかないが, 「ある程度必要」という回答が多かった能力や資質として, 現職・現職以外ともに挙げているのが「計算・統計などの数的能力」(現職73.0%, 現職以外72.9%), 「外国語の能力」(現職68.8%, 現職以外66.5%), 「パソコンなどIT機器の使用能力」(現職61.5%, 現職以外58.1%)である。「計算・統計などの数的能力」と「外国語の能力」については, 他の能力・資質の項目が「あまり必要ではない」, 「まったく必要ではない」という回答がほぼなかったのに対し, この2項目には必要性を否定する回答が多かったのが特徴的であった(「あまり必要ではない」と「まったく必要ではない」の合計が, 「計算・統計などの数的能力」については現職26.1%, 現職以外25.1%, 「外国語の能力」では現職29.9%, 現職以外31.6%)。上述したように, 今後身につけたい能力では1位の「英語・英会話」だが, 身につけておきたい能力ではあるが, 実際の業務や生活においてはさほど必要とはされていないことが, このような結果として表れたのではないかと考えられる。

他の能力・資質に関しても, 現職と現職以外の全体的傾向はほぼ同じであり, 社会人として最低限求められるものは, 職業に関係なく変わらないと言うことができる。本学では当然, 教員としての能力・資質を養成することに重点が置かれているが, 教員としてと同時に社会人としての基本的な能力・資質の養成を行うことに, さらに意識的に取り組む必要があるだろう。その方法等を精査し, 実施していくことが教職キャリア開発センターの重大な任務の一つである。

#### (5) 後輩へのメッセージ

アンケートの最後であるQ8には, 後輩へのメッセージを自由に書いてもらった。特に1期生など, 大学創立直後に在籍していた卒業生のメッセージには, 熱がこもった記述が多く見られた。本論文では紙面の都合上すべてを記載することはできないので, 平成23年7月に学部生全員に配布した「卒業生から在学生への応援メッセージ」というパンフレットを転載しておく(付図1および2参照)。これは学校現場で活躍する方々から, 教職とは離れたところにいる方々まで, さまざまな先輩たちの声を, 進路について, あるいは人生について, おそらくまだまだ迷いのある在学生の心に届けようと企画したものであ

る。このような形で卒業生アンケートを在学生に還元することにより, 学生の大学への帰属意識や同窓の感覚を喚起することにも本アンケートが寄与できたと考える。

### 3. おわりに

#### (1) 卒業生調査の目的と方法

以上, 前編と後編で卒業生アンケートの結果について考察とともに記してきた。そもそも卒業生に対する調査がなぜ必要なのか。Cabrera, Weerts, and Zulick (2005)は, 米国における卒業生調査を(1)アウトカム, (2)関与と能力, (3)卒業生からの援助, という3つの視点から分類している。米国ではすでに1930年代から卒業生調査が始められており, 1970年代まで主流であったのは, (1)のアウトカムのアプローチであった。アウトカムのアプローチが焦点を当てるのは, 卒業生の仕事の満足度, 職業の達成感, 市民・政治活動への参加等である。調査結果は, 入学希望者やその保護者に対し, 自学卒業生が成功したというアピールや, カリキュラム改革のためにも用いられてきた。1980年代以降, 高等教育研究において, いわゆる「カレッジ・インパクト研究<sup>3)</sup>」が影響力を持つにつれ, 卒業生調査においても, 卒業生の現在の職業や生活状況と, 彼女/彼らの大学時代におけるキャンパスライフへの関与(engagement)や, 大学時代に獲得した能力(competency)との関連に焦点が置かれるようになってきた。これらの調査は研究としての学術性を持つとともに, カリキュラムや学生サービスの改善, あるいは大学の説明責任の手段としても用いられるようになった。(3)に関しては, 米国の大学では, 卒業生からの寄付は大学運営のための貴重な財源であり, 卒業生の現在の職業や生活状況についてのヒアリングを行うとともに, 寄付を募ることも調査目的の一つとされることがある(Cabrera, Weerts, and Zulick, 2005, pp. 5-13)。

日本においても卒業生調査を数多くの大学がすでに実施しており, また卒業生調査に対する研究も行われている(小方, 2010, 吉本, 2004, 2007など)。吉本は卒業生調査の点検・評価方法についての論文のなかで, 調査を行う目的の確認・識別の重要性を示唆している。すなわちその調査の目的は「大学教育とその教育成果に関わる学術的究明」なのか, 「大学教育の点検・評価および教育改善にかかる探求(説明責任)」なのか。さらには前者では, 教育成果の理論的仮説を追究する「純粋科学」なのか, 特定の政策的焦点を持った「政策科学」なのか。後者では, 「外部評価対応」なのか「教育改善」が狙いなのか。これらをまず明確化することが重要であると指摘している(吉本, 2007, 81頁)。ただし吉本は「学術的究明」と「説明責任」という目的は統合可能であると述べており, そのうえで卒業生調査の方法論について詳細な検討を行っている(同書 81~88頁)。

本研究の場合は、卒業生の現状を知り、大学の学びが現在の仕事や職務上の困難を克服するために役に立っているか、あるいは今後、生涯学習のために大学を活用したいと考えているか等を知ることで、本学の学部生のみならず、卒業後も見通したキャリア教育の可能性を探る目的を持つものであった。したがって上述の吉本の分類では、おもに教育改善を目的とするものであったと言えるだろう。

## (2) 教員養成大学（目的大学）での卒業生調査の問題点

このような卒業生調査の先行研究を踏まえたうえで、教員養成大学においては、教員養成大学における独自の学びとは何か、それは一般の大学の学びとは異なるものか、大学の学びは職業とどのように接合するのかなどを、教員のライフコースのなかで考える必要がある。本学では上述したように、生涯にわたって「学び続ける教師」となるために大学時代に身につけておくべき50項目からなる「教員養成スタンダード」がすでに制定されている。それゆえこのスタンダードを大学時代に身につけた学生が、卒業後、教職キャリアをいかに形成していくかを調査することなども、本学独自の卒業生調査の形として考え得るものである<sup>4)</sup>。

## (3) 今後に向けて

今回の卒業生アンケートについては、結果の数値を示し、全体的な傾向を考察するにとどまっている。卒業生調査については、すでに述べた通り、学術的にも大学の説明責任にも活かすことができるものとして認識されている。本学においても今後、このアンケートの結果そのものを大学運営やカリキュラム改善に活かすのか、あるいはこの調査をたたき台として新たな研究を進めていくのかなど、この卒業生アンケート調査の活用を検討していくことが必要である。

## 注

- 1) <http://www.hyogo-u.ac.jp/facility/career/about.html>（最終閲覧日2012年11月16日）
- 2) アンケートの配布、回収、集計は株式会社エールバリューの協力で行った。
- 3) カレッジ・インパクトとは「大学の影響」という意味であり、山田によれば、「米国でのカレッジ・インパクト研究は、学習成果の評価法のひとつである直接評価に至るまでのプロセスを大学での経験、学生の関与との関係性とみなし、その過程や経験や関与の影響を解明しようとする一連の研究」（山田、2012、50頁）のことである。カレッジ・インパクト研究および研究者の詳細については同書50～53頁参照。
- 4) 例えばドイツの教育大学生について、在学中から入

職後を通じて長期的な調査・観察を行っている Rauin, 2007等の研究を参考にすることもできる。

## 引用および参考文献

- Cabrera, Alberto F., Weerts, David J., and Zulick, Bradford J., 2005, "Making an Impact with Alumni Surveys." In: Weerts, David J. and Vidal, Javier (ed.), *Enhancing Alumni Research. European and American Perspectives*. San Francisco: Jossey-Bass, pp. 5-17.
- Pascarella, Ernest T. and Terenzini, Patrick T., 2005, *How College Affects Students: A Third Decade of Research*, San Francisco: Jossey-Bass.
- 小方直幸, 2010, 「卒業生調査を用いた大学の教育成果の評価」, 大学基準協会『大学評価研究』第9号, 29～39頁。
- Rauin, Udo, 2007, "Im Studium wenig engagiert - im Beruf schnell überfordert: Studierverhalten und Karrieren im Lehrerberuf - kann man Risiken schon im Studium prognostizieren?" In: Universität Frankfurt Campus Service, *Forschung Frankfurt - das Wissenschaftsmagazin*, 2007/3, S. 60-64.
- 山田礼子, 2012, 『学士課程教育の質保証へむけて 学生調査と初年次教育からみえてきたもの』東信堂。
- 吉本圭一, 2004, 「高等教育と人材育成—『30歳社会的成人』と『大学教育の遅行性』—」, 高等教育研究所『高等教育研究紀要』第19号, 245～261頁。
- 吉本圭一, 2007, 「卒業生を通じた『教育の成果』の点検・評価方法の研究」, 大学評価・学位授与機構『大学評価・学位研究』第5号, 77～107頁。

## 謝辞

自由記述が多く、煩雑なアンケートであったにもかかわらず、お忙しいなか、丁寧かつ心のこもった回答をしてくださった卒業生の方々に、この場を借りて深謝申し上げます。

またアンケートの結果分析について専門的な知見とアドバイスを与えていただいた教員養成スタンダード開発室の龍輪飛鳥元特命助教にもお礼を申し上げます。

付図1 「卒業生から在學生への応援メッセージ」(平成23年7月に全学部生に配布) 表紙および裏表紙

## 大学外の世界にも 目を向けよう

◇ 時には遠く離れた環境に身を置き、海外にも飛び出し、人間として大きく飛躍する人生の短学期間に出たいと思いませんか。(30代・幼稚園)

◇ パックパックについて世界を旅して、その経験を子どもたちに伝えるような著書と意気込みをもってほしい。(40代・一般)

◇ 旅行、美術館や博物館等、学生時代に見聞を広めることも役に立つと思います。(30代・特別支援)

◇ いろいろな角度から物事を考えられるように大学での知識を十分に修得した上で、社会のしくみや政治にも興味をもっとほしい。生活者として。(40代・保育士)

★ 他にも、大学のうちに、英語・パソコンのスキル習得や、資格の取得をしておいた方がよいという意見がありました。

## 兵教大で学んでよかった!

◇ 兵教大ですごした年月は私の宝物であり、私の教育活動の原点です。(30代・小学校)

◇ 今でも、学生当分の要諦的カリキュラムは自分にとって誇りです。長期の教育実習や教材作りは、自分にとって大きかれています。これからは、日本の子どもたちのために、優秀な教員を目指してほしいと思います。(40代・小学校)

◇ 兵教大で学んだことが私の中の『不易』として揺るがない存在のままあります。初任研で講話を受けても既然大学で学んでいたことが多かったです。在学中は分からなかったことが……。 (40代・小学校)

◇ どうぞみなさん胸を張って現場に出て下さい。今やっている課題は将来の自分の血や肉になっていくはずですから! (30代・中学校)

◇ 兵教は、教員になるための知識はもちろんのこと、意識も高めてくれるような大学でした。教員になっていない友人もたくさんいますが、それぞれの分野で活躍しています。(30代・小学校)

◇ 一期生です。全てが何となく、全てが始まりでした。大学祭を作ろうと話し合い「燧祭」と名付けたこと、学祭パノフの広告をお願いするために自転車に社の中を走り回ったこと、なつかしい思い出です。パノフも携帯もない時代にゼロから動くことができたのは、仲間200人がいたからです。母校とみなさまのますますの発展を心よりお祈りいたします。そして私も教育の可能性を信じてがんばります。(40代・小学校)

## こんなキャリア・進路もあります

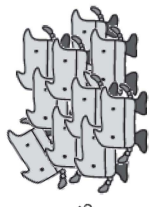
◇ 世の中には、本当にたくさん仕事があります。就職活動中にさまざまな仕事を検索し、自分の可能性を信じて頑張ってください。(30代・公務員)

◇ 教職に就かず警察官となりましたが、大学での経験はかなりの役立ち、無駄にはなっていません。むしろ、教師としての視点、授業作り等を学ぶことで、他の人にはない独自の視点を持っていると思います。(30代・公務員)

◇ 時間がかかっても本当に自分のやりたい所、納得のいく所を見つけたい。(30代・主婦)

◇ 初職という職業以外を希望する方は、卒業時は厳しい現実を突きつけられるかもしれませんが、社会人になっても可能性はたくさんあります。いろいろな世界を勇んで見て是非頑張ってください。(30代・一般)

編集:総合職業キャリアセンター設置事務局  
office-career-center@yogo-u.ac.jp  
発行:平成23年7月



学校現場でもにも勤務できることを  
楽しみにしています!!(多数の先輩の声)

## 卒業生から在學生への応援メッセージ

総合職業キャリアセンター設置準備室では先日、卒業後のキャリアについてのアンケート調査を卒業生全員に行いました。アンケートの最後は、先輩への応援メッセージを募集しました。たごの熱いメッセージが寄せられました。紙幅の関係で掲載できたメッセージはほんの一部で、また省略している部分も多々あります。在學生の皆さんにとって、きっと心強い応援・励ましになるのではないかと思います。(◇は女性、◆は男性です。職業で「一般」の場合は、会社員・団体職員・派遣社員等です。)

### 勉強・クラブ活動・アルバイト・恋愛・遊び・ボランティア… 大学時代に幅広い経験を積み、視野を広げ、 人間としての魅力を磨いておきましょう!

◇ 在学中の4年間に、いろいろな人と接し、様々な場に出会ってほしいと思います。(30代・小学校)

◇ 子どもからも保護者からも同僚からも信頼される「先生」になれるよう、様々な経験で自分磨きをして下さい。(20代・小学校)

◇ 時間を自由に使える若い今の間に、いろいろなことを経験し、幅の広い、奥の深い、味わいのある人になってほしいと思います。(30代・幼稚園)

◇ 自分が魅力ある人間にならないと、子どもたちは毎日を楽しんで過ごすことができません。常に謙性を磨くような姿勢を履きなさい。学生生活のうちにたくさんして、自分を磨いておいてください。(40代・幼稚園)

◇ 学ぶことの大切さをしっかりと身につけて下さい。そして、自分の専門は誰にも負けないうらいにおくと、とて役立つと思います。(20代・小学校)

◇ 遊びや部活だけではなく、必ず勉強を頑張ってください。(20代・大学)

◇ 現場の即戦力となるためには、大学で幅広く、そして深く知識を身に付けることが大切です。卒業してから、もっと学びの場をおぼえたいから、しっかりと勉強したいよう、しっかりと学習してください。(20代・小学校)

◇ 大学時代に頑張ったことで、友達との関係で学んだこと、課外活動で学んだこと、アルバイトで学んだこと……すべてが今の自分の糧になっています。大学時代頑張った分、就職してからの自信に繋がります。(20代・小学校)

### 大学では やはり学ぶことが重要なのです (たとえ今は分からなくても…)

◇ 目標をしっかりと、その目標に向かって今やるべきことをしっかりとやることです。回りでも無駄だと思っても…です。(30代・教育委員会)

◇ 教師には生徒に教える「知識」が絶対に必要です。(40代・中学校)

◆ 現場に出て大学で学んだことの意味が分かってきません。今は分からなくても一生懸命やれば後に生きていくことができること、目の前にあることに精一杯取り組んで下さい。(20代・幼稚園)

付図2 「卒業生から在学学生への応援メッセージ」(平成23年7月に全学部生に配布) 見開き

### 現場では気力・体力・強さ・若さが求められています!

- ◇ 教員の仕事は体力と気力を始めます。いろんな活動に参加して、鍛えておいてください。(40代・小学校)
- ◇ 少々のことでほろち込まない強い心を大学生活で育んで下さい。(20代・小学校)
- ◆ 信念をもってゆずれないところは大切に、叩かれても出る航になってください。(40代・小学校)
- ◆ 「やってみなぐちゃかららない」の精神で!!(30代・小学校)
- ◇ 若い先生方のパワーは勇気だけにとまらず教職員も元気にさせてくれます。(40代・小学校)
- ◇ 困難にも立ち向かえる、立ち向かおうとする力を身につけてください。(30代・小学校)

### 社会人としての常識・コミュニケーション・マナーを身につけよう

- ◇ 向よりコミュニケーション能力は必要です。そして当たり前マナーや常識を身に付けることが大切です。人より進んで行動すること、周りに気を配るなどです。(30代・小学校)
- ◇ 人に頭を下げることを、社会人になるまでに覚えておく必要があると思う。(40代・主婦)
- ◇ あいさつや礼儀、社会人としてのマナーを心得た人になってほしいです。仕事につく、つかないにかかわらず、生きていく上でとても重要なことだと思います。(30代・中・小学校)
- ◇ 笑顔であいさつが得意、謙虚な態度と一生懸命な執業があればどこでも活躍できると思います。(30代・中・小学校)
- ◇ 学生の間に自分の考えをしっかりと持ち、「自分はどう考えますか」と意識表示できることが大切だと思います。積極的に人と関わる人、熱心に仕事に取り組みの人が社会では必要とされているように思います。(20代・小学校)

- ◇ 職業に就くというのはとても大変なことです。今まで経験したことのない辛いことが沢山あります。私もたくさん涙を流しました。でも、たまに嬉しいことがあったとき、その幸せでそれまでの苦労が報われることがあります。小さな幸せを糧に、こつこつと努力すること、教師としてだけでなく、人間として成長していけると思います。(20代・幼稚園)

- ◆ 実態に教師になってみると思うようにいきず、自分の無力さを痛感することが多々あります。でも、その反面子どもたちから喜びもたくさんもらえます。すこく賞徳のいる仕事です。はありませぬ。(20代・小学校)

- ◆ 教師の仕事は大変です。過酷です。体力がいります。責任は重いです。何でも自由に好きなことができるわけではありませぬ。そんなこんな教師ですが、学校に行って、子ども顔を見ても、なぜか元気が湧いてくるんです。不思議ですよね。(20代・小学校)

- ◇ 教師についてはおっかだと思っ区面、社会の変化にもなる子どもや保護者の価値観・考えなど、対面に苦戦すること多いのが現状です。しかし、子どもたちの成長や、授業研究をして子どもたちの学力が向上したとき、教師ならではのやりがいがあるのも確かです。子どもたちの未来へ自分の力を貢献させて下さい。(40代・小学校)

- ◆ 理想は想像以上に七(しく、また変化や離間も多いです。しかし、教育はやりやりのある仕事です。人とのつながりや、生きることのすばらしさを感じる日々をおくれます。(30代・小学校)

### 教育現場は大変ですけどれどやはり教師は魅力のある職業なのです

### ストレスマネジメントも必要です

- ◇ 子どもたち一人一人がそれぞれ個性の、さまざまな問題にぶつかるとは当然です。そのよびよびに寄り添うたり、一人で抱え込まず、周りの人の協力を得ることがとても大切です。(20代・小学校)
- ◇ 文句言われてなんぼの世界、くらしい気持ちもあって、精神的にはしんどいですが、罵られる同僚や友人は不可欠です。(40代・小学校)

### 子どもへの愛情は教師の基本です。そして教師には子どもの未来が託されています

- ◇ 教員実習の担当の先生から学んだ「児童を温かく見つめる目」は、一歩大切にしていることで、子どもを愛する心を育ててください。(40代・小学校)
- ◇ 未来の子どもたちを育てることは、未来を創っていくことでもあります。困難なことにも出合おうと思っありますが、とても魅力的な仕事でもあります。(40代・小学校)
- ◆ この厳しい社会情勢の中でも、子どもたちが夢をもち、希望にみちた学校生活を送ることができるよう、情熱をもち「ともに希望を語り合う」教員になっください。(40代・中学校)
- ◆ 多くの教員は、教育という本当に崇高で、誇り高き仕事に携われることに喜びを感じています。教師を目指される学生の皆さん、どうか夢をもちて現場へ来てください。我々と共に、未来を担う子どもたちを育てていきたいと思います。(40代・小学校)

### いろんな人と関わろう

- ◇ 多くの人と話をして下さい。自分と違う考えを知ることによってプラスになると思っます。(40代・大学)
- ◇ できれば学校関係者以外の世界との関わりを持ち続けることをおすすめします。バリエーションよい生活がおすすめです。(40代・特別支援)
- ◆ 大学院生と交流をもつ機会を大切にしてください。明退の図はどても貴重な財産に(経験者)を授けるとともに(経験者)になると思っます。(20代・小学校)
- ◆ 兵隊には理学生が驚多くいます。日本人として日本をどう愛するか考えさせられたり、それぞれの国の考えを知ったりすることができました。(20代・小学校)